

## 韓国伝統思想におけるソンビ精神

盧 相 浩\*  
 翻訳 鈴 木 文 子\*\*

Ro Sang O

Translator Fumiko SUZUKI

'Sunbi' Spirits in the Korean Traditional Philosophy

[キーワード：伝統思想、韓国、ソンビ、光明思想、儒教]

### I. はじめに

人間が集団を形成するのは情がその要因であり、またそれぞれの本性にしたがって集団を維持発展させながら民族や国家の歴史を形成している。

孔子の論語に「東山に登れば、魯の国が小さく見え、太山に登れば天下が小さく見える」という言葉があるが、これは人間の生きる術を示したものとして、孔子の哲学をよく現している。

歴史には、明らかに根があって、そこから幹や枝が生じている。根というのは、自然の歴史であり、幹や枝は状況によって生じる歴史であるといえる。

どの民族も自分の土地で、自身がその土地の人間であることを認識しながら生を営み、その民族の太初的な思想をもつようになる。

韓国には1万年の歴史があるが、韓民族が伝統思想を形成するようになるには明らかにしっかりとした根源的思想が存在していたためである。状況的な生を営むには、伝統的な生の基準が必ず必要となるのである。

韓国の固有思想の形成は、檀君朝鮮時代にみられるように「阿斯達（アサダル）」に首都を置いてからのことである。この阿斯達というのは、「明るさ」という意味があり、韓国の伝統思想の根源を一言で表現するならば、この「明るさ」、「光明」ということになる。そしてこれを韓民族は「神道思想」と名付けた。

この「明るさ」を土台とした歴史が重ねられて行くにしたがって、外部思想との調和が必要となってきた。このことは、神と物の調和が提示されている韓国固有思想においては自然のなりゆきであった。

韓民族は、神道思想を固有思想とし、中国の文化と接触することで「神仙思想」を、儒教、仏教、道教と接す

ることによって「風流道」を形成した。また朱子の理学を受容し、性理学に発展させることで道学の道を開き、ソンビ思想が定立し、ソンビの国となった。

ソンビ精神というのは、人が人らしくなり、自ら光明となろうとする韓民族の固有思想を実践することである。したがって、韓民族のソンビ精神は、孟子がいう「他人の不幸を見過ごすことのできない心（不忍人之心）」を本質としながら、義理を生命より重要視し、殺身成義を生理想とし、これを実践することにある。

韓民族の伝統思想は、これまで外来文化を受け入れる中で混乱を呈してきた先人たちによって、必ずしも実現されてきたとは言いがたいが、現代になって、民族精神をしっかりと見直そうとする努力が活発になっていることは幸いなことである。この講演は、韓民族精神の正しい定立を意図して始められるものである。

まず、ソンビ精神の根源、ソンビ精神の形成と宇宙観、倫理観、宗教観、そしてソンビの姿の順に概観しようと思う。

### II. ソンビ精神の根源

韓国の上古時代は、桓国時代、神市時代、檀君時代に区分され、つづいて扶餘時代となる。上古時代には韓民族の基本哲学である「三神五帝」という思想がある。ここで神というのは、天地の法則（天地之理）であり、三神というのは、3つのものが一体となって（体一用三）、万物を生育する力（権能）のことである。3つのものとは、創造を司る「天一」と、教化を司る「地一」と、治化を司る「太一（人）」である。また、五帝というのは、黒、赤、青、白、黄または水、火、木、金、土で、世界の物質の基本要素であり、宇宙を司る原理のことである。

\* 釜山教育大学校倫理教育科

\*\* 島根大学教育学部社会科教育研究室

三神五帝説は、三神が五帝を監督しつつ、各々が広く現れるようにする大宇宙の自然の法則（理法）であると考えられる。

このような韓民族哲学を土台とした上古朝鮮の書物に、造化経として「天符経」があり、教化経には、「三一神誥」、治化経としては「参佺戒経」があり、韓民族の根源思想を明白に示している。

韓民族の思想は、「三国遺事」（一然大師、1206-1289 高麗25代忠烈王の時の国尊）のなかの「古朝鮮史」にその根源が窺われる。

古朝鮮史にはつぎのような記述がある。

「古記」によれば昔、桓因という神の大勢の息子たちの中に桓雄という子がいた。彼はある志を持って人間の世界を治めようとして、しばしば天から地上へおりた。父親が息子の志を知って、自分も太白山においてみるとそこはたしかに治めるに足る有益な土地のように思えた（弘益人間）。桓雄は配下を3000率いて、太白山の頂上にある神檀樹におりたち、そこを神市とし、桓雄天王となった。彼は、風（風伯）、雨（雨師）、雲（雲師）の神を率いて、穀物、生命、病、刑罰、善悪などを管理し、人間についての360余事に関することを司ることで世上を治め変化を与えた（在生理化）。

この時1匹の熊と虎が同じ洞窟に住みながら、いつも桓雄に人間に変身させて欲しいと祈願していた（願化為人）。これに対して、桓雄は、蓬1束とにんにく20個を与えて、「これを食べて100日間、太陽を見ずに過ごしたなら、即人間の姿になれるであろう」といった。熊と虎がこれを食べて太陽も見ずに過ごして37日がたったとき、熊は女性の姿になったが、虎は禁忌を守れず、人間にはなれなかった。

熊女は結婚してくれる相手がおらず、いつも神檀樹の下で子どもを授けてくれるよう祈願していると、桓雄が男性に変身して結婚することで子どもが授かり、男の子を産んだ。彼の名は、檀君王儉といった。

檀君は唐の高祖が即位して50年の庚寅の年に平壤に都を定めその時即ち国を朝鮮と名づけた。また、白岳山の阿斯達に首都を移し、そこを弓忽山あるいは今彌達といって、1500年治めた。周の虎王が即位した乙卯の箕子朝鮮の時代になって、一時蔵唐京へ退いたが、再び阿斯達にもどり山神となったというが、この時1908歳であった。

上記の古朝鮮に関する記録は、韓国人の原初的ないつも人間を主体と考える自我意識による理想を示しており、韓民族の歴史意識、国家意識、世界観を表している。こ

の上古「古朝鮮」の歴史を通して、ソンビ精神の基盤となる韓民族哲学の意味を考察してみようと思う。

第1に、人間中心の宇宙観と世界観を提示している。

天上にいる桓雄が天の下にいる人間世界に志を立てて、太白山の頂上神檀樹のもとに神市をひらき、また熊と虎が人の姿に変化することを祈願し熊が女性に変化した。

ここで天の意志を象徴する天上の神や、自然の本能を象徴する地上の動物が人間になることを望んだということは、人間を志向する宇宙観に根ざした人間中心的世界観という哲学的真理を意味しているのである。

このような人間中心の宇宙観と世界観による人間観は、韓国思想において、人間が人間になろうとする人間志向の最も素朴な人間哲学を形成する根元的な精神となった。

第2に、変化の原理を提示している。

この世に人間が出現することによって、自然は変化という原理をもつようになるという大法則を示唆している。神が人間になり、動物も人間に変化した。人間は変化という可能性をもつことで文化の発達を促してきた。また、人間は万物を理致という原理によって治めることのできる可能性を天から提供されているのである。

ここでは、自然のすべての生成変化の理致（道理）は、人間を志向した変化の原理であることを示している。神が人間になろうとし、熊と虎が人間になろうとすることは、これらが人間存在の生成原理でありながら、人間が万物を理致で治めることのできる権限をもつようになる重要な契機を得たことを示している。

第3に、人間の位置を提示している。

天から下りてきた神である桓雄と地上で変化を通して表れた物である熊女が、神市で結婚という過程を経て、神物の一体化をなし、韓民族の開国始祖である人間としての檀君が誕生することになる。

このような神と地上の動物が一体化することによって、人間の品格は、神の品格と動物の品格の調和されたものとなり、神物統一体となった。そのために、人間の本性は、神性と物性、すなわち知恵としての神明性と自然の本性の統一体としての中間者的位置にあることになる。

第4に、宗教的信仰にもとづく倫理的戒律思想を提示している。

天に根源をおく神は、唯一の存在であり、完全な絶対的存在であるが、地上に根源をおく配下たちは完全性を志向する相対的存在である。そして神である桓雄は、熊と虎に蓬1束とにんにく20個を与え洞窟の中で100日間、太陽を見るなどという宗教的戒律を与えたのであるが、熊は戒律を守り、動物的本能を純化させる内面的修練という自覚をとおして、人間を想定した精神世界にでること

ができた。このようにして、熊は単純な本能的動物ではない、創造能力を与えられた、美しく賢明な人間に変化した。ここで韓国人の倫理観は、宗教的信仰に根ざしていることがわかんと思う。

第5に、神物両性の人間が主体的自覚によって新しい世界を発見している。

檀君の歴史で重要な問題は、自然の歴史を新しい人間の世界の歴史に転換させ、人間中心の新しい世界を作るところにある。これが、開闢、すなわち光明である。このような新世界の開闢は、神物両性が集約された人間としての、人間の新しい自我発見によってのみ可能であった。神物両性の人間という観念は、「神はすなわち自然であり、自然はすなわち神である」という自然哲学的原理によって古代韓民族の意識の中で自然に形成されていた。

檀君は、韓民族の歴史が始まって最初の間人間世界を自覚した人物である。したがって、彼が都と定めた阿斯達は、はじめて韓国人が主体となって作った〈光明の土地〉である。このような光明の首都を定めた国である古朝鮮では、人間固有の本質性、すなわち神性を主とし、天地万物の異質性、すなわち物性を従とする人間主体的自覚原理によって発見され作られた新しい世界が始められた。

このような檀君朝鮮に現れた思想を神道思想といい、神道思想は、1万年の韓民族の歴史において一貫した中核的精神となった。

韓国固有の神道思想である人間主体的な自覚をもつという「光明思想」は、高句麗、百濟、新羅の建国の思想の中にも展開してみられる。

(例えば)高句麗の東明王は解慕漱(ヘモス)と河伯の娘(柳花)の間に生まれたが、月と日の光を受けて受胎し、卵となって生まれたとされる。また新羅の王の赫居世も白馬が昇天したのち、川辺で紫の卵から生まれた。

ここでは、神である解慕漱と白馬は光明の天神を象徴し、父系をあらわし、柳花と紫の卵は地神、水神を象徴し母系を意味する。このような天の精気と地の精気が交感することで東明王と赫居世が誕生したということは天父地母が調和した一体思想によるものである。このような一体思想は古朝鮮の胎動思想に基づいたものである。

河伯は、莊子の「秋水篇」に登場する人物である。当時中国は、無為自然を理想とする道教文化が盛んであり、わが国の高句麗以前や高句麗の初期にも道教が盛んであった。このことから上述の歴史には韓民族の神道文化を父とし、中国の仙道文化を母として受容する主体的姿勢が窺われるのである。したがって、三国の建国理念の中で

は、我々がどこまでも韓民族の主体性を強調しつつ、古朝鮮の神道文化に西の中国の仙道文化が調和してできた「神仙道思想」という新しい文化が展開されていったのであると考えられる。

このような東神西仙の文化が調和一体となった神仙道思想は、檀君朝鮮にみられる「在世理化」、「弘益人間」の思想を継承し、新羅の「光明理性」、高句麗の「以道興治」の思想に展開され、人間の自覚によって光明の大道を継承するようになった。

そして、三国(高句麗、新羅、百濟)時代の建国の歴史にあらわれたLogosとしての光明思想と理道としての大道が具体的に思想化し、統一新羅の仙風意識の影響を受けた、風流道という伝統思想をつくることになる。

この風流道は、5世紀はじめに韓民族の固有思想に儒・仏・道の3教が受容され、調和されて、韓民族の自覚意識のもとにできた伝統思想である。また、風流道は当時伝来した愛倫、禮倫、道倫を中心にして、孝忠思想を強調し、また圓光法師による世俗五戒(事君以忠、事親以孝、交友以信、臨戰無退、殺生有損)を戒律として守り、三徳(謙虚、儉素、淳厚)を尊重した。

このような風流道は、朝鮮時代になって、韓民族思想を実践強化する思想として展開され、また儒教の節義精神として確立し、朝鮮王朝時代のソンビ精神につながっていく。

また、朝鮮時代は、中国宋代の儒学、すなわち朱子学である理学を受け入れ、16世紀後半には、四端七情を論じて情を問題とし、18世紀前半は、人性性同異論を論じて(本)性を問題視し、19世紀末には心主理、心主気を論じて、心の問題を哲学的に究明するなど朝鮮性理学が活発に展開された。

また、性理学に加えて実事求是の「実学」がソンビ精神を培い、続いて「東学」が起こり、朝鮮ソンビ精神を益々発展させていった。

### Ⅲ. ソンビ精神の形成と宇宙観、人倫観、宗教観

高麗末から朝鮮朝初期にかけて、仏教と道教が韓国人の精神世界に内面化され、一方儒教は社会を導く上での外面的、現実的な働きをしてきた。

儒教精神とは仁義の精神である。ここで仁とは、内面的な体(形)であり、義とは外面的な用であり、ソンビ精神は、仁を体とした義精神の発露から生まれ出るものである。

そして、孔子や孟子もこの仁義を君子、志士、仁人たちの重要な実践徳目と考えた。

ソンビの語源は、丹齊 申菜浩（1880-1936）が新羅時代まで遡って調べたところによれば、先人、仙人であるという。また、金忠烈教授は、次のような見解を示している。

「義をよく説明する逸話に高麗の家臣であった鄭夢周（1337-1392）の話がある。彼は、李王朝の太祖である李成桂の「何如歌」という宥和的詩の問いかけに対して、「この身が百回変わって、白骨となり塵土となって、魂の存在さえわからなくなっても自分の君子に対する一片の丹心は変わる事がないであろう。」という「丹心歌」を返した。丹心歌をうたった圃隱鄭夢周は、「他人の臣下となってどうして二つの心をもてましよう。私は既に身の処し方を心得ておりますので、この身が高麗500年の末運に遭遇し、危険な目に会おうとも避けることなく、凜として、秋霜烈日のなかで名誉を重んじましよう。」ともいっているが、このような忠節を守ろうとすることがまさにソンビ精神の生きた証であり、人が人らしく生きるとは何たるかを示している。のちのどのような教養書よりも鄭夢周の話は人々に影響を与え、韓国のソンビ精神は、鄭夢周先生の節義精神から形式化されたといえる。」

また、最初にソンビということばが文献にあらわれるのは『龍飛御天歌』（1445、世宗27年）においてである。

朝鮮朝のソンビは、儒や士ということばでも表され、「ソンビ儒」、「ソンビ士」ということばは、すべて儒学の士を指す名称であり、その集団を「儒林」、あるいは「士林」と呼んだ。

このようなソンビは儒者の中でも強烈な精神力が気質に昇華された人、すなわち鄭夢周のように、徳、功、学を休むことなく追求し殺身成義を実践する大節を守る人である。したがって、ソンビたちは高麗の末に新王朝に屈せず、節義を守った三隱と呼ばれる圃隱、牧隱、治隱を崇拜してやまず、その精神を継承發揮し、これをソンビの節義精神に発展させ、朝鮮王朝には多くのソンビが現れた。

このようなソンビは朝鮮朝500年の進むべき路を定めた原動力ともなった。

ソンビは、もっぱら社会の精神的指導者としてその地位を堅持した。朝鮮朝の社会でソンビとなるためには、五書（小学、大学、論語、孟子、中庸）と五経（詩経、書経、禮経、易経、春秋）の学習が必修であった。そのなかでも最も基本的な必読書が『小学』（南宋、劉子澄 1189編纂）であり、『論語』の「為政篇」に現れる人生の過程がソンビの生活の理想となった。

ここで『小学』にあらわれるソンビになる一生の学習

課程を概観すれば以下のものである。

第1期は、出生してから9歳までで、この時は家庭で初歩的教育が施される時期である。この時期は、学習者が幼いために父兄が教え理解させる教化形式の教育となる。

第2期は10～39歳までで、学堂（学校）で教育をうける時期である。10歳からは師をもとめて家を出て外で生活しながら師に学ぶようになる。学習も自発的な段階である。15歳になると弓、乗馬に習熟し、20歳には婚礼に向かって成人となり、礼と文武が兼備された大夏という舞踊を習いはじめる。30歳には妻子をもって、所帯をかまえるようになる。一方で、広く学んで世事に滞りがないようにし、友人とつきあうときにも志を持ってつきあうようになる。

第3期は、40歳～69歳までで、官職について活動する時期である。40歳には官職につく。30年つとめて、道が明るくなり、徳がおこって官職にでても、抱負を実践するようになる。50歳には大夫に昇進して、国家の大事を預かり処理するようになる。

第4期は、70歳以後である。官職から退き、家庭に隠退する時期である。余力があったとしても王に官職を返し帰らなければならない。これは、ソンビとして、引き際の道理を明らかにし、寵愛の報恩をむさぼらないようにするためである。

このように、『小学』はソンビを育てる教育課程を提示している。これは、受教、修学、行動、隠退の過程を重要視する人生の過程でもある。特に、修学30年、行動30年であわせて60年におよぶ時期を考えると、ソンビは何をする者であり、ソンビの道は何を意味するのかを教えてください。ソンビは、孟子の「幼而学之」、「壮而行之」ということばを忠実に履行した社会階層である。

このようなソンビとなる道を李退溪は、「大事小事にかかわらず、またはじめてであっても最後でも、教えるを実行すること」だとし、李栗谷は、「教育の課程を順序どおり実践していくこと」であり、また「ソンビは一生の間聖人になることを自らに期する（聖人自期）」者であると述べている。

ソンビの社会的な立場というのは、教化者であり、文化を伝承、創造するものである。そのためには、ソンビは忠孝を重んじ、学問に通じ、禮を尊び、勤儉、節義、人間尊重の精神などがその人格の土台とならなければならない。

また、このような精神を得るためには、理学的な知識がなければならなかった。したがって、太極、陰陽、理氣、乾坤などを把握し、天地万物の基本原理解、自分の始

まりと伝承を知ることができると信じられている理論、宇宙観を成立させていった。

また、ソンビの人間関係は、自分が担う役割に最善をつくすことで、その位置を明確にするところにある。孔子がいう「君君臣臣父父子子」の正名観をソンビは倫理観とした。

また、ソンビは究極的な問いとして人間の始まりを知り、また、その始まりからどのような過程で今日に至るのかということを知ろうとした結果、体得した孝を倫理観としていることは明白であった。

ソンビ達の生活の場は、家庭、学校、官職の場であった。

ソンビの教育目標は、人の倫（人倫）を明らかにすることにある。したがって、「明倫堂」ということばがいつも勉学する場所にかけられた。

人の倫とは、君臣間の義、父子の親、兄弟の序を徹底的にまもるところにある。

特に、ソンビ達は生活の究極的な問いを理学と呼ぼうとした。そのため、太極は、ソンビの宗教的信仰の対象となった。ソンビは生命の根源を重要視し、孝を強調し、この孝を中心とした祖先崇拜文化が高まった。そして祖先崇拜がソンビの宗教観、あるいは宗教文化であった。

#### IV. ソンビの姿

ソンビは自然人の姿をみせている。

漢文知識層として儒学を専門にし、自然態で生活している者を両班という。また、この両班を朴趾源は、『両班伝』でソンビとよび、「両班は元々色々な言葉で呼ばれるが、本ばかり読んでいる両班はソンビ、政治に関与している両班は大夫、徳の高い両班は君子という」と述べているところから、ソンビはその行動によって名称を異にしていることがわかる。

また、諺に「ソンビの遊んだところには龍が出て、鶴が遊んだところには、羽であふれる」という言葉があるが、これからしても人間の行蹟や実績は、必ずその後に影響を与えているということがわかるが、自然人としての高邁な人格と高い学徳、青雲の志を抱いた人格者がソンビの姿である。したがって、ソンビは哲人、道人としての自然人である。

ソンビは、自主的な人物（自主人）でもある。

韓国の言葉で、善良な人をさすときに、「ソンビのような人」といい、最も恥辱的なことばに、「人間とは思えない奴」という言い方がある。李栗谷の『擊夢要訣』に「学者（ソンビ）は必ず誠の心を持って道に向かい、

世俗の雑事に自分の志を揺るがせることのない人である。」とある。したがって、ソンビは、主体的精神に学徳を兼備し、修養を積んだ能力人、志操人、正義人と呼ばれる魅力的な人間である。

新羅の10代王、奈解王のときの勿稽子という人は、一生を武道とコムゴ（楽器）と郷歌をよむことで過ごしたソンビであった。雄々しい人であったが、その行動は一介の村の長のようであった。2回も戦いに出て、戦功をおさめたが、何事もなかったかのように泰然とした態度で、酒を飲み近隣をわたり歩くような人であった。自分の功を自慢したり、論功行賞がないと不満をいうこともなく、官職を褒められても受けることはなかった。剣術を学びに来る人にはコムゴを教え、コムゴを習いに来る人には剣術から教えたという。

また、天と人間間の和気を維持するために、いつも祈禱をしていたのだが、「（お前を）助けよう」という（天の）言葉が繰り返し聞こえていたという。また、刀は人を殺すものではなく、生かすものであると教え、林の中に入ってコムゴを奏でながら歌をうたう自然の妙理を求めることをこの上ない喜びとしていたという。勿稽子はソンビとしての風格を備えており、優れて調和的であり、融通性もあり且つ透徹でもあった。そこに、われわれは自主人としてのソンビの姿をみることができる。

朝鮮朝の李退溪は、日常の「敬」を自主的生活の目標とし、また聖人自期を志すことを力説した李栗谷も、自主人としての人格をもつソンビの模範であった。

また、清貧、勤儉を生活信条とした星湖 李翼や、茶山 丁若鏞も質素儉朴な禁欲主義を唱え、財物は大きな道理から得なければならず、「徳が根本であり、財物はとるに足らない物である。」と述べた。このように主体的精神のためには財物は草芥のようなものであると考え、正しく生きようとする者がソンビであった。

ソンビ精神には、どちらかという官僚志向的精神と学者志向的精神にわけられるが、これはソンビの個性によって異なるが、どちらかといえば学者志向性が強かった。学者志向のソンビは、崇道学の立場から、君子に対しても徹底的な上命下服の関係のみではなかったと思われる。

例えば、李退溪が官職にいるとき、君主に提出した上訴文を見ると44回中、36回（81%）が君主の招請を断る内容であり、李栗谷も52回中24回（46%）が辞退している。ここでの辞退の内容は、一身上の都合や父母の奉養の為が大部分であり、君主もこれを学者らしさ、すなわちソンビらしさとして広く許容していたと思われる。

このような自主精神の主であるソンビは、厳格な修練

から体得した信義を生命のように考え、自身には厳しく、他者には春風のように温和で寛大であった。

また、ソンビは義を守る人（正義人）としての様相を呈している。

李栗谷の『聖学輯要』によれば、「ソンビは窮せど義を忘れず、栄達しても道はずれず。窮しても義を忘れないためには、ソンビは自らを忘れず、栄達しても道はずれないためには、百姓を失望させないことである。」と述べているように、ソンビは義を守る義人であり、清貧の精神の所有者である。

朝鮮朝の世祖（世宗王）の時のソンビ、李承召は判書の官職にありながら、草葺きの家に住んでいた。かれの隣人に当時兵曹判書の役にいた人が住んでおり、ふたりはお互いに親しく交際していた。ある日李承召が宮中に入り、礼学に関する問題を論じていると隣人の兵曹判書が入ってきた。判書は、李承召に挨拶をしたが、李はほとんど知らん顔であった。君主が不思議に思い、「兵曹を知らないのか」と尋ねると「全く知りません」と答えた。兵曹は当惑し、君主も怪訝におもったが、これは近年兵曹判書が豪華な屋敷を建てたことを李承召が知ったためであった。李承召にとっては、豪華な家を建てた兵曹判書を知っていること自体が汚辱的であり、この汚辱から逃れるために、李承召は君主の前でも知らないふりをしたのだった。

その後、世祖も李承召の「知らない」という態度に感じるところがあり、財をむさぼったり、華美ないでたちをした朝廷の官吏がくれば、「お前は誰であったかな」ととぼけた返答をして、李承召の心に答えたという。このような「知面不知乎」の伝統が官職社会の慣用語となり、清貧にはずれることがあれば、すぐに「お前は誰だろう」という言葉で絶交をし、互いに規制しあう風土を作った。

このような社会正義を守ろうとするソンビの姿は、清貧な生活にあらわれ、これは社会の義理（守るべき道理）として昇華された。

島山 安昌浩は、「ソンビの道には、ソンビの道があり、気があり、節がある。傲慢にならず、罪惡の道に入らず、信義心が強く、羞恥心を生命のように考え、負った責任は身命にかけて遂行し、他人に決して指を差されることはしない。ソンビの言葉、考え、行動はすべてのひとつの手本となるべくしなければならぬ。彼は、意欲的であって、万事を自主的に行い、判断が明確で、一度抱いた志は曲げることがない。従って、ソンビは、いつも松竹のように青くまっすぐで、凛としている。」と述べている。このことから、ソンビは節義の生活をする正義人（義

をまもる人）であり、志操人としての様相を呈している人でもある。

李熙昇の随筆『木履ソンビ』にも正義人としてのソンビの姿が良くあらわされている。

「冬なのだから薪があるわけではない。冬至雪上、3尺の冷たいオンドルにあまり具合のよくない布団を敷いて寝たが、寒さが骨身にしみてきて、足下からガチガチと音がするぐらいに全身が固まってくるので、四肢をすくめて、歯をくいしばってみるが我慢できない。歯をガタガタさせながらソンビがいうことは、“この布団やろう。このけしからん寒さめ、今はこんなだが、来年の春になったら見ている。”」

と豪語していたという話が伝えられているが、これは昔の南山のソンビ（木履ソンビ：貧しいソンビの代名詞）の性格を端的に良く表わした話である。すなわち現実には負けているが、心意気は負けていないというしたたかな自尊心、一本気なまじめさ、両班は凍え死んでも（本来薪をくべるオンドルに）糠の火は使わぬという志操等は、ソンビの生活信条であった。

ソンビは、地に足をつけ、公明正大に生きようとする志操すなわち、正義を信条としている。これは、韓国ソンビの姿であり、韓国ソンビ精神の中核をなすものでもある。ソンビは、礼儀正しく、廉恥心があり、節義に生き、節義に死ぬことを潔いと考えた。ソンビは、心に邪悪な考えを持たず、ひたすら正道を凛々しく生きる社会の義を守る人である。

また、ソンビは愛国者としての姿をみせている。

高麗の忠宣王が、ある過ちを犯していたのを監察糾正であった禹倬が上訴をする姿で宮廷を訪れ、勇敢にも訴えたのであるが、近臣達は上訴を読み上げることをはばかった。これを見て、禹倬は声をはりあげ、「君は近臣となっても君主の過ちを正すこともできず、悪行を受け入れるとは、君は自分の罪がわかっているのか」というと、ひとりの側近は驚き恐れ、王は恥じた様子だった。禹倬は、官職を成均祭主にまでなって、隠退し礼安に隠居したが、忠烈王がその忠義を美しく思い、2度ほど呼んだが、出て行くことはなかった。これは、『三綱行実 禹倬敢諫』に記録されている。

禹倬はソンビであった。国の規律、秩序は、その国の君主の意識と行いにかかっている。君主が政事を正しくするも誤るもそれは臣下の補弼にあり、臣下としては、どうして曲がったことができるだろうか。禹倬の行動は臣下として、君主を助けるという意味で君主をとがめるのであり、個人的な反感ではない。君主は国であり、国は個人の生命の基盤である。正しい生活の基盤を重視す

るソンビは愛国者でもあるのだ。

ソンビとしての愛国者は、国と師と父母が一体であるとする実践的倫理をもっている。国家はソンビが暮らしていく生の基盤であり、自分を永遠に保護してくれるところと考える。そうであれば、君主は国家であるので、君主の非理は正さなければならなかったし、君主の非理は自身の非理として責任を感じなければならいものである。

ソンビが国難を経験すれば、愛国の義人となり、救国の指導者となり、治国の聖人となることは偶然のことではない。まさに、ソンビ自身のための仕事が、愛国、救国、治国とつながっているためである。

## V. 結 び

民族に伝統思想が生まれてくることは、人間が生きていく過程のなかでは、極めて自然な成りゆきである。

人間に人間としての価値があるとすれば、それは人間になるための努力にある。その努力の目標は、もちろん人間本性の自覚である。太初、韓民族とともに息づいてきた原理は、人間が人間になるための光明意識であった。光明意識は、進取的で調和的な特性があった。韓民族は、光明意識を精神にして、調和を身体にし、ひとつの一体思想を発展させてきた。

韓民族の哲学的特性は、気哲学的傾向にある。もちろん理をなおざりにするのではないが、理を形而上的存在として想像しながら、気哲学を発展させた。ソンビ精神の義中心も結局、気を重視した思想的傾向から出てきた自然の結果であった。

ソンビは、理、気、太極などの理論的宇宙観をもっている。したがって、究極の存在と合一する方法を講究するようになり、自然に孝や忠を重要と考え、これを生の基本方針とするようになっていった。

ソンビ精神の特徴は、宇宙の基本的な原理から日常的なことまでを解決しようとする学問的な姿勢にある。そのためソンビは、生死存亡、天地の万物や自らの始まりを明らかにする宇宙の基本原理解（太極、陰陽、理気、乾坤）を究明し、また、自分が今日存在するルーツとしての家系、祖先、家廟、祭祀を重視し、また、日常生活を営む上で重要な忠、孝を重んじるようになった。そしてその結果、ソンビは自然人、自主人、正義人、愛国人として生きることになった。

ソンビ精神は朝鮮朝500年の文化繁栄の原動力となり、韓国のソンビは、韓国の歴史の主役であった。

しかし、ソンビ精神は男性だけに求められたものでは

なかった。少女も『小学』の基礎課程を着実に習得し、結婚後には、「銀粧刀」を身につけ貞節を生命よりも重要と考えて暮らした。女性は幼いときは父母に従い、嫁しては夫に従い、老いては子に従う「三従之義」の道理を自ら実践した。もし道にはずれる行為があれば、自決して純潔を守り、国もそのような女性に対して「烈女門」という記念の門を建て、後生の鏡とした。また、ソンビの夫人は、貞節を生命よりも重要と考え、例えば船着き場から船に乗る際に、揺れて「船頭の手を握った」というために、身を投げ節義を守った。ソンビがソンビらしくあったのは、ソンビに内助をする女性達の純潔精神が強かったためで、夫人達の純潔は、貞節という形で表された。

このようなソンビ精神は、韓国精神史に脈々と流れ、明確な民族性に発展し現代に及んでいるのである。

付記：本稿は1995年9月4日の釜山教育大学校教授招聘記念講演における盧相活教授の講演原稿を翻訳したものである。